

(まさか・・・痴漢・・・そんな・・・こんな電車の中で・・・)

女性は痴漢にあっていた。

満員電車、最初は揺れと共にぶつかっていると思っていた程度だった。

しかし、今度は指先で臀部を刺激されている事が明らかだった。

(いやぁ・・・でも動けないし、周りは男性ばかり。

こんな所で騒ぐなんて恥ずかしくてできないわ・・・)

何とか女性は臀部を左右に降って逃れようとする、がそれが更に痴漢を興奮させる材料となった。

(ああ・・・もうう・・・でも・・・なんで・・・おかしい・・・)

痴漢は、女性のくすぐったい部分、言わば性感帯であろう部分を衣服の上からも

分かっているかのように刺激してくるのであった。

最初は臀部だけだったが、内股、脇腹、胸のサイド、脇の下、耳、

縦横無尽に痴漢の手は動き、まるで左右の手が別の意思を持っているかのように

女性の性感帯を責めていく。

「くう・・・ふう・・・ごほん」

耳を刺激された時、思わず声が漏れてしまった。

周りの乗客の目が一斉に女性の方を見る。

女性は何とか咳払いでごまかし、耐えていた。

(くすぐったいようなぁ・・・ああ・・・でも・・・おかしな気分。

この痴漢・・・ああ・・・私の体を・・・知り尽くしているの・・・あああ・・・)

そんなに気持ちいいわけでも無い、しかしくすぐったいのが続く。

そんなこんなをしている内に、女性の下着は湿りを帯び始めていた。

(くううああ・・・なに？カンジテ・・・いるの？こんな責めで？

ううん・・・そんなこと・・・あるの？ああ・・・でもくすぐったい・・・ああ？き・・・きもちいい？)

痴漢はくすぐったいを積み上げ女性の感度を上げ、徐々に際どい部分を責め

女性の体を混乱させつつ、すでにある程度絶頂へと誘っていたのだ。

すでに女性は痴漢の術中の中にあっただ。

痴漢は徐にスカートの中へ手をつっこみ、湿った下着の上から秘部を押した。

「アフゥ！！」